

声をあげる

新島学園中学校

二年 根岸 花帆

二年前、桜が美しく満開に咲き乱れていた小学校の卒業式の日での出来事です。

私が教室に入ると一人の男子が椅子の上にて体育座りをして、震えていました。それを周りの人達は輪になって笑っていたのです。私は最初、訳が分からずに近くにいた友達に何があったのかを問いました。すると、友達は言いました。

「関わらない方が良い。」

と。何度聞いても、そうプログラミングされたロボットのようには繰り返すのです。

「関わらない方が良い、無視しよう。」

私は何度も聞きました。すると、

「卒業式に髪を固めてくるなど言われたにも関わらず、固めてきたらしいんだよ。」

と教えてくれました。確かに先程から周りにいる人達は何度も何度も、

「先生が可哀想。」「不良。」「かっこつけ。」
等と叫んでいました。正直、私はいじめられていた男子の事があまり好きではありませんでした。というよりも、学年の殆ど全員がその男子の事を嫌っていました。今日は嫌いな子が大失敗をしてくれたという、今までの不満を一気にぶつけるには最高の場だったのです。私は最初、皆と同じように無視をしようと思いましたが。しかし、いじめられている理由については違和感を覚えました。確かに彼は規則を破りましたが、それに対して私達がとやかく言う必要はあるのでしょうか。先生が彼を注意し、彼が反省すればそれでよいだけでしょう。私達は彼が髪を固めてきた事によって被害を受けた訳ではないのです。私はどうにも、もやもやとしてしまい、友達に自分の考えを吐き出し、言いました。

「あの人達、止めてこようかな。」

私は驚きました。そんな気持ち自分があつ

たことに。その言葉は私の口からありえない程にするりと出てきていて、瞬時に後悔しました。止める？そんなことが私に出来るはずがない。友達もきつと一蹴するに決まっている。そう思ったからです。しかし、友達は真つすぐに私を見つめて、言いました。

「君が行くのなら私も行く。一人では行かせない。」

私は泣きそうになりました。この言葉が嬉しかったこともありすが、何よりそこまで私を思ってくれていた友達に対して、私の考えを一蹴する、と勝手に決めつけていた自分自身が恥ずかしくて仕方なかったからです。そして私達は男子がいじめられている所に行き、声をあげました。

「ねえ、そんな声でとやかに言う必要無いんじゃないの？せつかくの卒業式なのに。」

自分が思ったよりも低く大きな声が出ました。一緒に来た友達は驚いて泣きそうになっていました。周りの人達は殆どが私達に対し怒りを見せたり、指をさして、笑ってきたりしまし

た。私は呆れて席へ戻ろうとしました。すると、今まで傍観者だった子が私に抱きついてきました。私は周りの人達に急に怒鳴ってしまったことを謝り、教室に来た先生にも事情を伝えようとしました。すると、先程私に抱きついてきた子が先生に私の事を説明してくれていました。先生も私の事を慰めてくれ、私は涙が溢れてきました。その後の卒業式では男子をいじめていた人達とも和解でき、楽しい式になりました。あの時私を信じてくれた友達とは今も連絡を取り、よく一緒に遊びに行く親友です。いじめていた子の中には、すっかり仲良くなり、大事な友達の一人となっている子もいます。

最初は誰しも、声をあげることに抵抗すると思います。しかし、必ず自分の声に対し、共感し、仲間となってくれる人がいます。確かに、沈黙が正解の時もあるでしょう。それに、声をあげることによって何かを失うかもしれませんが、それでもそれ以上のものを得ることができると私は信じています。これからも私は声をあげ続けていきます。